

Title	北蒙古：ノインウラ(Noin ula)の遺跡
Sub Title	
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.89(597)- 97(605)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

北蒙古——ノインウラ (Noiin ula) の遺跡

蒙古、東新疆省及び西藏は、今日まで依然ヨーロッパの探險家の注意を惹いてをる。最初の二地方は殊に考古學者と古生物學者を魅惑してをるが之に反して西藏は、殊に動物誌を研究するものに興味あり、なかんづく地質學者地理學者、及び人種學者にとつて興味が深い。蒙古に於ては、この最近二年間、二遠征隊が調査に従事した。即ちそれは自分の指揮するロシア地理協會派遣の「蒙古西藏探險隊」とアンドリュウスのアメリカ派遣團の二つである。後者は中央アジア盆地の深い溪谷に於いて脊椎動物の遺骸を發見して世界的名聲をかち得た。

「蒙古西藏遠征隊」は、一九二四年の全作業期をセレンガ Selenga 河の高原盆地 Xara トラ Tora

北蒙古——ノインウラの遺跡 (梅原)

トラ Orkhon オルクホンの諸河附近に過し、遠く調査の手を南西ケンタイ Kentei 南ハンガイ Xan-gai までひろげた。ハラ河の附近の峭峻にして風光美なるノインウラの山脈中三つの近接せる山峽スウヅクテ Suzukte ツルンチエ Tsuruntie グチルチエ Guchirte の中に蒙古西藏遠征隊は、相分離せる三群の歴史記念物を發見調査した。そは古代墳墓でその數二百十二、快適な斜原の上、小流に沿ふて存在する。(1) 古代住民は、曾つて莫大の勞力をかけ、十米より十四米に至る深さの穴に、大いなる木槨をしつらへ、中に貴人の遺骸とその一切の備品を入れた。各高さ二米ばかりの段をなして中につぼまつてゆく(挿圖参照) 深い溝を掘り南面の階段に口をつけた。この側、この入口より

(五七)

莊嚴に遺骸を運びこみましたのである。蜿蜒たる葬列が、峽谷をたどつて谷の底から登つてくる刹那を吾人は目に見る如く想像することが出来る。大きく堅い木棺を墓の底にその運ばれてきたと同方向、即ち南から北への

方向に横へられる。棺

はその内部は、圖案のある織物で飾られ、外部は彩色及び金の裝飾模様ある黒漆でよそはれてをる。棺の下には周圍に角ある麋の疾驅し、その背には羽ある山猫がその獲物を齒と爪で寸斷する所、或ひは怒れる牡牛が豹と格闘する状を(2)あらはした刺繡飾りを持つ敷物があつて、動物をあらはした場景の中に古代支那文字が花の如く織り出されてをる。(3)敷物は複雑な裝飾のついた絹で縁をとつてをる。棺の前に粘土



景光掘發及蹟古ラウインノ

製の大きな甕、また兩側、及び金色の突起に奇妙な裝飾のついた見るも妙なる漆製の支那蓋(4)の一行がおいてある。葬室の壁及びそれにつゞいた覆道には絹の精巧な幕が垂れさがつてをる。その

上に會つて高官又は將官であつた人々をあらはした鳶色の毛のギリシヤ刺繡が下つてをる。是等の人物は、すばらしい白馬にまたがり、華々しい扈從にとりまかれてゐる。或ひはまた口に蛇をくはへてをる巨大な鳥に對し矢をひいてをる狩人

をあらはしてをるものもある。所々壁に沿ふて塚の奥に小山の如くおびたゞしい青銅器のその使用今日まで不明のものを積みかさねてある。(5)それは大小さまざまの鬱金香の花の形で(6)鈎のついた

装飾のついた絹で縁をとつてをる。棺の前に粘土

まばゆい金でとりまかれしもの、壺や盤の形をなし、裝飾つきたるもの、頭巾、長針、或は香爐の形をなせるものなどがある。

青銅器或ひは銅の種々な器物と共に、又木や皮の鞍敷、絹の覆、及び馬の胸又は頭にうるさい昆虫を防ぐためかけた毛の飾りが發見された。その外例へば火を造るための不思議な木の道具、鹿の様な動物の像などがあつた。石製品としてはアジアに非常によろこばれる硬玉を發見したばかりである。(7)

同様に、頸飾りとして琥珀でつくつた様々な藝術品、環狀の蛇をあらはすもの、或ひは貴人が官位をあらはすため頭につけた小さい球などが存在した。また多くの衣服の堆積、中には完全な衣服もまゝあるもの、肌衣、頭巾、又は廣く又は狭く貂の皮で縁をつけた袖のある短外套、全ては吾人に地の點からもそのつくり方からいつてもおどろくべき富と優美の印象をあたへるものが發見された。柔い繊巧な細工の靴が、圖案のある毛皮又は單色の絹からなつた一種の上靴の形で保存されて

をる。(8)それから若干のその使用方法不明な絹の小囊があり、またパイプのため穴をあけた煙草入の今日の蒙古人又は支那人の使用すると全く同形のものがあつた。男或ひは女のきはめて柔軟な毛の束が、護符と共に絹の鞍敷の中にこめられしもの、又はたゞ赤い組糸でごく無雜作にひつくゝられしものが出た。

蒙古西藏探險隊により發見され、調査されたノインウラの墳墓の時代については、陶器、その裝飾、及び鏡の裝飾、及び小さい漆盎が手掛りをあたへる。(9)考古學の専門家は、この裝飾の時代を漢代、即ち紀元前兩世紀に歸する。

佛教の聖火の色である金屬、赤がちな黄金、太陽は全ての考古學的發見物にあらはされてをる。額に紅い寶石をつけた神話的動物の巨大な頭、スキタイの壺にある裝飾をおもはせる馬の像、耳環奇妙な形の指環、それからまたあらゆる種類の丸い圓錐形の物品、棺につかふ多くの金板や裝飾品等が存する。

考古學的作業の終り、今年の三月に、地下水の

動きが最少限度なる時、スウヅクテ群の塚「濕」といはれしものが葬穴まで土が撤去された。吾人は多數の織物、硬玉の瓔珞、鳥の圖案、黒粘土の完全な壺、それからなによりも貴重な絹の大敷物その上に支那文字あり、禿鷹、山猫、斑鹿の圖あるものを發見した。(10) 壺は北西隅に發見された。それに反して北東の隅には前のよりも遙かに小さい今一つの壺の破片を見出した。

發見された織物の數に關しては「濕」と呼ばれた塚は「高級」と吾人の呼ぶ塚と同等である。もし吾人が此二つの墓の非常に濕つてをることを考慮に入れるならば、吾人は、寒冷な水（零度）の存在が織物を保存するすぐれた方法であるといふ假説をたて得る。「濕」塚の織物は、その質の點に於て「高級」のそれに劣る。棺の下にある敷物は豪華の程度劣り、裝飾モチーフは同じ様な思想の上になりたつてをるが同様一層貧弱である。粗末に切り繕はれた巾地の山は、この塚の建造者の生活程度低きことをしめす。「濕」塚よりひきだされた織物中に吾人は金モールの巾地がある。しかし

一般に吾人はこの塚でも又他所でもごく少ししか金モールを發見しない。中央及び西方の敷物の覆は、複雑な動物裝飾で覆はれてをる。西方の敷物の裝飾には、その中一つが不可解なる四匹の動物がみえる。棺の下部にある鳥の裝飾は、(11) 二つの理由、第一にそれは死人と同時代にして固有藝術品であり、第二にその裝飾は、全棺が同じ様な裝飾に覆はれてをり、たゞ時代と共にごくもろい漆は剝落して、塵となつてしまつたといふことを示す。問題の堆積の保存は、其處で、棺が下におかれた一木片に觸れてゐた事實に歸する。

最深にして最富の「高級」又は「第六」塚内の調査はなほ完了しない。葬室の外部の天井は、龜蜥、魚、鳥、及び菱形の不思議な裝飾のつける藝術的巾地で覆はれてゐた。巾は梁の上にじかにのつてをり、非常に美しい性質の毛皮で覆はれてゐた。毛皮は地壓で非常に緊く締つた苔の層で包まれてゐた。

もし吾人がノインウラの墳墓よりとり出された全ての物品、同じくその遺骨を考量にいれるなら

ば、曾つてモンゴリーにすみし民族を大體完全に表現することが出来る。その民族は、けつしてモロコ人種に關係づけ得ぬ、むしろアリア人種に結びつけうるものである。(12)

(カゾロフ原著 P. K. Kozlov, Comptes rendus des expéditions pour l'exploration du Nord de la Mongolie, 1925 Leningrad (露文) より抄譯す、抄譯に際しては波蘭人ヤウオルスキイ氏の援助を借りたる事多し、記してその勞を謝す)

カゾロフ氏の統裁する露西亞の「蒙古西藏探險隊」の手で行はれた外蒙古ノインウラ山の古墳の出土品に就いては、既に我が羽田教授(大阪朝日新聞)をはじめ石田幹之助(歴史教育)小牧實繁(歴史と地理)坪井良平(考古學研究)等の諸氏が其の紹介乃至評論を試みられて、其の學術的興味の多い事を傳へられたのであつた。處が如上の諸篇は英のパーリントン雜誌所載のエッツ氏の文の單なる翻譯又はその説の紹介評論であるので、筆者たるエッツ氏がたとへ、劍

橋大學のミンス教授の助を借りたとは云へ、實物を観ないで、急に書き上げたものであつたので、往々にして誤りを傳へ、また重要な部分を逸しなどして、事實の紹介として充分でない憾があつた。従つて「史學」編輯者が更に本來のレニングラド學士院報告に遡つてより忠實にそれを我が學界に傳ふべく、カゾロフ氏自身の報文を譯出せられたのが此の一篇なのである。

さてこゝに譯されたカゾロフ氏の文はまことに面白く書かれてゐて、讀んで興味の多いものではあるが、氏自身は地理學者で考古學者ならぬところからこれも遺物の説明などにしつくりとせない部分があり、また本來が略報告なので意を盡さない點も含まれてゐる。で其の發表に當り、嚮に私が前後二回に亘り實物を調査した縁に依つて本篇を送致して、遺物の實際に就いての附記を求められることになつた。詳しい考古學的事實の記載は他日報告を書く時に譲るがこゝに私の觀た處に基いて其の主なものに簡單な補記を草して編輯者の希望に副ふことにした

而して此の機會に月餘のレニングラード滞在
調査上に與へられたオルデンブルグ教授ボロフ
カ博士はじめ學士院の方々の厚意を衷心より感
謝したく思ふ。

(1) 以下に譯出せられてゐるノイン・ウラ山
地に於ける古墳の構造なり、また副葬品の記
載は、大體に於いて發掘調査の際最も豊富に
遺物を存した第六號古墳(後段にカズロフ氏
の「高級」の墓と呼んでゐるもの)のそれで
あるが、然し同時に他の古墳の副葬品を擧げ
た處も見受けられる。で其の氣づいた著しい
ものは註記することにした。一體カズロフ氏
一行の調査した古墳はすべてで十個と傳へら
れてゐるが、私の見たレニングラードに遺物
の齎されてゐる古墳の總數は十八であつて、
それが各々號數を以て呼ばれてゐる。尤も此
の中には單一な遺物を存するに過ぎない第九
十號墳の如き類があるから結局やゝ目星しい
副葬品の見らるゝのは十個位になるわけであ

る。中で第六號墳と命名せられたものゝ首位
を占めてゐることは上記の如くであるが、な
ほ第一號、第四號、第十二號、第二十三號の
四個もやゝ著しい遺物を有して、第一號墳は
支那の玉の多い點で擧ぐ可く、第二十三號墳
は細金細工其他の裝飾品や漆器も優れたもの
があり、また第十二號墳は織物の類——刺繡
や絹等——が目立つてゐて、これが後段にあ
る所謂「濕」の墓と云はるゝものと思はれる。
なほこれはカズロフの發掘に關係はないが一
昨一九二七年の春に同じノイン、ウラ山地の
古墳中第五號墳と呼ばれる一個が蒙古の學者
の手で發掘調査せられて建平五年の銘ある漆
坏を發見した事を附記して置く。

(2) 此の動物文こそスキタイ式特徴の顯著な
ものとして學者の注意を惹いてゐるものであ
る。其の寫眞は不充分なものではあるが既に
「歴史と地理」(第十九卷)にも「考古學研究」(第
一號)にも載せてあるから參照されたい。

(3) 古代支那文字とあるが實物を觀ると、そ

れは明に樹木の圖で同じく刺繡で出来上つてゐる。これは前者と共に駱駝の毛で縫い出されたものと云ふ。

(4) これが樂浪古墳から多數に見出されると同一な漆の耳附坏(銘文に黄耳楕とあるもの)に外ならぬ。文に金色の突起とあるのは金銅製の耳である。本漆坏は地が木質からなつて黒漆の上に朱漆で双禽文が渦文様と共に描かれてあり、更に底面に「上林」なる朱書と、側面に建平五年なる製作の年時を示す刻銘を有する重要な遺品なのである。此の年記の存在を始めて注意したのは伯林のキュンメル教授(Prof. Otto Kimmel)であるが、私は最初の入露の際解讀を試みて、それを大阪毎日新聞に報じた。次に挙げるのは再度の調査に依つて若干の補訂を加へた銘の全文である。而してその建平五年が漢の紀年で西紀前二年に當ることは改めて説くを要しない。

建平五年九月。工王潭經。畫工獲壺。天武省。
本文此の段の記述に盍一列とあるが現在レニ

ングラードに將來の第六號墳出土の漆坏は單に一個あるのみ。従つて此の條同じ漆坏四個を出した第二十三號墳の事實を混じたものであらう。

(5) こゝに多數の青銅器を見出して、而も其の用途が不明とあるが、實物を觀ると、しかく解釋に困難なものがある様に見受けない。一體カズロフ氏發掘の古墳中比較的銅器を多數に藏してゐたのは第十七號墳竝に第三十四號墳であつて、第六號墳は寧ろ他の副葬品に比して其の數が少なくと云ひ得るのである。右の前二者の出土品には銅盤(洗)各種の銅壺三脚附燭臺等の支那漢代の銅器に通有な類があり、第六號墳には朝鮮大同江面第九號墳に見ると同じい金銅の小飾金具類を見受けると共に他方北方系の有脚兩耳附銅容器片を存して、これが研究上興味を惹いてゐる。

(6) 此の大きいものは第二十二號墳の出土品を指すのであつて、同形品が二十七個も發見された。其の形は關野博士等が朝鮮の樂浪遺

跡から發掘して、箭頭なる名稱を與へてゐるものを著しく大きくした類で、私は種々の點から推してテント等の棒の頭部飾りと見る彼地學者の説に賛したく思ふ。小形の樂浪出土品と相近いものは第三號、第三十七號墳等から見出されてゐて、其の或物は木質の柄の部分を存し、總長三尺内外なのを示してゐる。

(7) 單なる硬玉の偏平に切斷した片に穿孔したものは多くの古墳に存在して、これがノインツラ古墳の副葬品の持つ一つの特色をなしてゐる様にも見ゆるが、形の作り上げられたものとしては、小さな飾玉の外ではエッツ氏の擧げてゐる第十二號墳出土の双龍透し彫の飾りと共に第一號墳から壁、墳等支那漢代の特徴を備へた類の發見を數ふ可きであらう。

(8) 此の衣類の完全な保存状態こそ第六號墳副葬品中驚異に値するものである。いまこゝにそれを詳記する自由を持たないが、所謂胡服の研究に絶好な資料なのは明である。

(9) 本古墳群の年代に就いては佛のペリヨ教

授がはじめ六朝時代説を上説註(4)の漆坏にある「上林」なる銘の書體などから推して主張して、本文のカズロフ氏の漢代説に反對せられたが、該器に別に教授の注意から逸した漢の盛時の製作を明示する紀年銘がある以上其の説は成り立ち得ない。のみならず發見の遺物中、支那の製作品と覺しきもので、今日吾々の有する知見から年代の判じ得る類、例へば銅器漆器玉器など、孰れも漢代の特質を備へて、カズロフ氏の年代觀の誤つてゐないのを示してゐる。特に漆器にあつては上記の漆坏の外になほ年代考定上緊要な好材料がある。其の一つは註の(1)に附記した一九二七年秋に第五號墳から出た漆坏の銘の示す紀年であるし、他は第二十三號墳出土の同じく漆坏に描かれた文様の、大正十三年秋藤田亮策君一行の樂浪古墳發掘調査の際に發見した綏和元年の銘ある銅釧漆盒のそれと全く同一である點からする推定である。此の前者は調査者の關係から庫倫の博物館に藏して、實物を

観るの機會を持たないが、私は嚮にオルデンブルグ教授から、寫眞の送致を受け其の銘の解讀に従ふの欣びを持つたので、此の機會に其の寫眞を載せ、併せて解讀し得た銘の全文を録して識者の參考に供することにする。

建平五年。蜀郡西工。造乘輿縣形(?)。畫木黃耳楮。容一升十六龠。素工尊。髹工哀。

上工壽。銅耳黃塗工宗。畫工□。形(?)。工豐。清工白。造工夫造。護工卒史巡。守長克。丞駿。掾豐。守令史嚴主。

一字の不明は同部で器が折斷缺失してゐる爲である。さて銘の示す處朝鮮の樂浪の遺跡から見出さるゝものと全然同一體であつて、これを時代の接近する居攝三年の盤の銘と對比するに形(?)工豐、守令史嚴などと同じ人名すらを見出すのである。

(10) 此の一條の記載は實物との間に相違がある。こゝに云ふ禿鷹(?)等の刺繡の圖のある大敷物には支那文字は存してゐない。支那文字のあるのはすべて絹織物であつて、此の文

字織出し絹は私の見た處では六種あつた。彼の新神靈。廣成壽萬年。の銘を示すものは其の一例なのである。

(11) これは棺の表面の黒漆の上に描かれたもので、現存最古の繪畫の一として大正十四年秋東京大學發掘の樂浪古墳出土の漆盆の漆畫に比肩すべきものである。飛禽の部分だけを切り取つてレニングラードに將來、保存上の修理を施して昨春蒙古に送致した。いま庫倫の博物館に藏してゐる筈である。

(12) 多數の發見品中にはこゝに擧げてないので學術上から見て吾々に興味を惹く類が少くない。ほんの一例を擧げるならば南朝鮮の三國時代の新羅の古墳から出る白樺の冠帽と同じ類の存在の如きそれである。此の類竝に各種の織物類の價値に就いてはいま書いてゐる全般に亘つた報告書に於いて詳述するであらう。(昭和四年十二月二日)

梅原末治